市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 0797(32)1131
88/9 通巻21号 (1部100円) 市芦救援会 発行人 玉本 格

日 第12回審理 10月4日(火) AM10~12 前田証人反対尋問
程 第13回審理 11月8日(火) AM10~12 同 上

第十一回公開口頭審理

組合弾圧の工作が次々と暴露

公文書(学校日誌)まで偽造

市芦救援会事務局

去る九月七日、第十一回公開口頭審理が開かれました。前回は引きつづき、処分者側証人前田和夫市芦前校長に対し、申立人側代理人分銅弁護士より反対尋問が行なわれました。救援会会員をはじめとして遠方からも多数の傍聴者がつめかける中、河村・深沢両先生に対する不当処分に関して、勤務時間の周知・管理、処分事実をめぐる証拠書類の点検などきびしい追及がなされました。とくに、市教委が処分証拠書類として公平委に提出している市芦学校日誌の中で、私達が入手していたコピーとは異なるものが発見され、処分者側の証拠書類偽造・改ざんをきびしく追求しました。勤務時間の校内運用という実態の中で、あえて組合役員二名を「無断職場離脱」として処分し、一定の「合理性」をもたせるために公文書である学校日誌ですら偽造改ざんしていたのです。証拠書類としてデッチ上げた事が明白となり、処分の不当性が一層明らかにされました。次回も引きつづき前田証人への反対尋問が行なわれます。処分者側の不当労働行為を具体的に追及していきますので、多数の方々の傍聴参加をよろしく願います。

も／く／じ

処分証拠書類の公文書は改ざん処分の不当性がますます明白に	市芦救援会事務局	2
お願い 市内定期ビラ配布について	市芦救援会事務局	7
障害者が街で共に生きる みんなの「麦の家」		8
みんなの「麦の家」賛同のこと	えんぴつの家 玉本 格	10
異議申立書		11
お願い 九・二九市芦反弹圧闘争二周年集会への参加について	市芦救援会	12

第十一回公開口頭審理報告

処分証拠書類の公文書は改ざん
処分の不当性がますます明白に

市芦救援会事務局

前日にひきつづき前田証人に対する反対尋問が行なわれました。証人が処分者側主尋問の中で、「勤務時間の周知・徹底」「勤務時間の厳正な管理」「学校日誌への不在確認等の記載」等を行ってきたと証言していましたが、今回の審理でその証言が全く事実を反するといふ事が次々と明らかにされました。

勤務時間の厳正な管理が、昭和六一年九月の処分当時なされていたのかという尋問の中で、現場の長として合理的運用と考えていた事が、十二月に入り市教委が否定したという事実をひき出しました。また、水泳時間の勤務時間の割りふり変更を校長もしてこなかったという事実や、六一年度においても十時出勤を雇用条件として正式教員を採用して、その勤務を認めてきた事実もひき出しました。市芦の現場教員の自発性・創造性を尊重する形で、勤務の管理に巾がもたされてきたこと、校長もそれを認めてきた事実が次々と明らかにされたのです。

さらに、処分の事実関係の点検の中で、極めて重大な事実が明らかにされました。処分証拠書類として提出されていた学校日誌が改ざんされているという事です。申立人側証拠として学校日誌の写しが提出されたことで、公文書偽造・改ざんが明るみにされました。その時の処分者側のあわてぶりが見るし程で、前田証人はもとより、寺内代理人などはあわてふためき、市教委ぐるみの共謀を思わせるのに充分であったと思います。

その後、次々と学校日誌の記載のウソが暴露されていきました。深沢先生が当日校内にいたにもかかわらず「不在」とされていたり、試験で学年教師が全員午後後に退校しているのに、その中の組合役員が特定されて「無断職場離脱」として記載されているという事実が次々と明らかにされました。処分の不当性が一層明白になった審理でした。以下、反対尋問の一部を抄録しておきます。

勤務時間の厳格管理は処分のあと

分銅弁護士(以下分銅と略)

勤務時間の周知徹底の件ですが、第八回審理で六一年三月三十一日までの勤務時間、割りふりについては職員会議もしくはストの予告があった場合に通告していたと証言してますが、いつの職員会議ですか。

前田証人(以下前田と略)

ちよつと記憶ありません。

分銅 管理職の方から、勤務の割りふりを職員会議で明確に報告したり、後のように掲示したりしたことはなかったのでは

前田 まったくなかったことはない、回数是非常に少ないと思いますけど、何かの場合には答えていた。

分銅 何かの場合とは、組合がスト予告をした時のことでしょうか。なぜその時に言う必要があったんですか。

前田 市教委からもストの知らせがあり、そういう点はちゃんとせよという事もある。分銅 勤務時間が、ストの時は何時からストに入るのか明確にする必要があったんでしょ。勤務時間の始期を明確にしてたんでしょ。

前田 まあ、それもあります。

分銅 それ以外に理由があったんですか。

前田 勤務時間についての自覚をうながした。分銅 勤務時間がはっきりしないから、ストに入ったら何時から何時までがストで、賃金カットの対象になりますよと、それを明確にするために言ってたんでしょ。

前田 はい。

分銅 周知というのは、全員に対して管理職として明確に言うことじゃないんですか。

前田 勤務時間がずつと変更がありませんでしたので、よくわかっておると。

分銅 わかっていったというよりも、教員の場合の勤務時間というのは、はっきりさせてないけれども、時として必要になるとそんな時のみははっきりさせていたということですね。

分銅 六一年九月一日からの勤務時間の割りふりについて、職員に周知されたんですか。

前田 職員会議で申しましたし、掲示もしたか。九月一日から厳格に実施するとか。

前田 近々このとおりにすると。

分銅 近々とはいつ頃なんですか。前田 実際には十時出勤について、十二月一日からと。

分銅 十二月八日からはではないですか。

前田 私が申したのは十二月一日なんです、組合が市教委と交渉しまして、組合との了解のもとにやるのが十二月八日です。

分銅 組合が了解したんですか。

前田 市教委から聞いてますが、ともかく十二月一日の段階では交渉するのでもってほしいということですよ。

分銅 勤務時間を厳格させるといふのは、市教委からの教員に対する指示という事だったんですか。

この件について、六一年十一月二日に職員会議をしたのを覚えてますか。

前田 はい、はっきりとは覚えてません。

分銅 十二月からをメドに実施という際に、案を出されたでしょう。

前田 試験中は午前中ですが、三時までは学校にいてほしいと、休憩の後の休息について厳格にいうと学校において、組合も市教委と話して、その代わりに試験中も四時までおるといふ話を市教委とした。

分銅 校長がわざわざ三時といっているのに、組合が四時までおりますという話をするわけがないでしょう。今の証言は事実ですか。あなたがおっしゃったことを言いますから。

十一月二日の職員会議で、試験中は三時ではなくて二時に下校してもらって構わない。試験中の一日研修を認める。式の日は午前中で帰ってもよい。それらを確保する。勤務時間は十二月一日から守ってほしいと言われたんでしょ。

前田 そうだと思いません。

分銅 ところが十二月四日になって、市教委と組合の交渉で、校長先生が言われたすべてを市教委が否定したでしょ。四時までおってくれなどと結果としてなつたと聞いてるんですか。

前田 結果としてそうなるかと聞いた。

分銅 現場の管理職であるあなたでさえも試験中は二時で帰ってもよい、研修は認めると言っていたのを、市教委はもっと強行だったんですね。あなたとしては合理的運用だと思われてたんでしょ。

前田 思ったからそう言ったと思います。

分銅 勤務時間について厳格な管理がなされるようになったのは、本件処分の後である六一年十二月以降になりませんか。それまでは比較的運用としては、教師の創造性とか自発性にまかせるような運用がなされてたんでしょ。

勤務時間変更も運用でしていた

分銅 六一年九月以降の勤務時間の割り振りについて、変更しようと思えば市教委が決めて、校長が決めることはできないのでしょ。

前田 相談して。
分銅 毎年七月一日から十日までと九月一日から十日までの間の水泳時間は、勤務時間は変わりませんか。

前田 かわりません。
分銅 午前中三時間で、休憩時間に授業がくり上ってきますが、いつ変更したんですか。

前田 別に定めてなかった。
分銅 それは学校長の運用でなされてたわけですか。

前田 そういうことです。
分銅 条例どおりしなくて問題ないわけですか。

前田 私のミスで、厳格に市教委に伝えてなくて、これを周知させることをおこたってた私のミスです。

運用上、十時出勤を条件とした教員を採用した

分銅 採用される際に、十時以降の時間を決めて、勤務の割り振りどおりでない職員を採用された場合はないですか。

前田 ……

分銅 あなたは十時から出勤する事で結構ですとかいう形で正規職員を採用したことは。
前田 あの… よくないことなんです。

正式に私の方からは申せませんという事で、私の知らない所で教頭が黙認したという形で。
分銅 十時出勤を前提として採用されたでしょう。あなたはそういうことを知らんとおっしゃるんですか。

前田 いえ、表向きはそういうことはできないということ、実際はそういう形です。
分銅 表向きはできないといっても、あなた方はそういう条件で採用されたんですよ。

前田 あの… はっきりとした条件ではありません。
分銅 その方はずっと十時から来ておられますでしたか。

前田 はい。
分銅 労働条件になってませんでしたか。

前田 あくまで運用上であり…
分銅 運用上そういう事も、個人のいろんな諸条件によっているんな運用ができる状況にあったんでしょう。

前田 市教委には申ししておりませんで。
ズサンな不在確認

車を移動させても不在で処分
分銅 終業時間の管理について、毎日校舎内

分銅 ……

でしよう。それこそトイレの中で調べないと、不在を確認するということは、そういう事でしょう。校舎内を全部さがさなアカンでしよう。

前田 ……
分銅 六一年七月一日の件ですが、深沢さんの車は外においてあったと。あなたはこの日を処分理由にしていますね。

前田 出ていくのを確認しましたから。
分銅 いつ帰ったんですか。

前田 それはわかりませんが。
分銅 なぜ本人に確認しなかったんですか。

この日おられたでしょう。車はあったし、現実には深沢先生とも話をしたでしょう。
前田 ちょっと記憶にありません。

分銅 この日も現実に学校に一日おられた人でしょう。
前田 出ていったのを私が確認しました。

分銅 出ていったって、車を移動させただけで、出ていったことになるんですか。

処分証拠書類を改ざん

分銅 処分証拠資料として添付されていますが、学校日誌について聞きますが、教頭が本来は書かれる担当になってるんですか。

前田 はい。
分銅 教頭先生が記載されて、その後にあな

を見まわっておられたんですか。

前田 二回ありまして、四時前後は主として校門のところから駐車場あたり、五時頃には離れた特別教室など。

分銅 まわられる目的は全員の教師について現実におられるかどうか不在を確認するためですか。

前田 はい。
分銅 そんなことできますか。職員室におられる教師もいるでしょうし、運動場におられる教師もおられるでしょうし、あちらこちらにおられるわけでしょう。教室におられる先生もいるでしょう。

前田 主として出ていかれる方を校舎内から見れますから、あと残っている教師は限定されまして、特別教室・準備室・体育教官室あたりは特に行かなくても電話で確認できる日もあります。

分銅 体育教官室とか理科の準備室とかそんな所へいちいちドアをあけていったんですか、本当に。そしたら、当然教師の側からもあなた方が毎日なにをそんな監視しとんやと抗議みたいなのがでるでしょう。各部室のドアをいちいちあけてまわってたら。

前田 あの…、ほとんどが職員室で確認できるわけですけども、ごく少数の人が…。

分銅 でも、一人でもいなければ、その人の不在を確認するためには全部まわらなアカン

から書きかえるとか言って、ハンを押してくれと言われてハンをおしたことがありますか。

前田 いえ、印カンは他の人の印も当日または二三日中におしますの。
分銅 乙五号証の一三、六一年四月二二日の学校日誌を示しますが、これ書きかえてませんか。

前田 これは全部教頭の字ですし。
分銅 あなたのハンがおしてありますが、後から書きかえなかったかときいているのです。

前田 この用紙全体をですか。ないと思いません。
分銅 そんな事実ないですね。

前田 はい。
分銅 この日誌をよく点検しますと、用紙がちがっているんです。(中略)この四月二二日の用紙は、六月十日以降の用紙と同じ用紙なんです。一枚だけちがうんですよ。これ、書きかえてるでしょう。用紙が二種類の中に出てくるというのはおわかりですね。

前田 はい。
分銅 そんな、書きかえる筈ないですよ。

前田 はい。
分銅 処分に出すものに書きかえた書類を出したりしたら大問題ですよ。他のも書きかえてるかもわからへんですからね。実際に書きかえてませんか。

前田 私には記憶がありません。

前田 ……

分銅 ……

分銅 ……

分銅 ……

分銅 ……

分銅 ……

分銅 では、証拠として、甲第一四号証を出します。(同じ六一年四月二二日の学校日誌の写し)これは井上教頭の字ですね。

前田 はい。
分銅 この校長の押印はどなたのですか。
前田 私のです。

分銅 これは、四月頃にあったと思われる用紙ですね。内容的にはほとんど同じなんです。時間の記載のところかかえてあるんです。乙五号証の方は、深沢教諭(一四・〇〇)一六・五七)となってるのを、(一四・〇〇)一七・〇〇)と、元々ののはなってるようですね。これは、後で気がついて、勤務時間の関係で問題になるなと思って、あとから気がついてかえらなうでしょう。ちがいますか。明らかにかかえてるでしょう。あなた方はご存知ないかもしれませんが、組合の方でもちゃんとコピーをとってあったんです。

傍 なんでも同じ日の日誌が二枚あるねん!

分銅 改ざんしてますね。同じ字で内容的にも同じで一部をかかえてる。これ一つやったら、他のみんな疑われますよ。

傍 処分のために作ったんやろ!
分銅 他のもこんなにしてませんか。
前田 いえ……

前田 ……教頭が書いていますので。
分銅 この九月二日、河村さんはこれを理由として賃金カットされてますね。この日は一年の先生方一三人全員が午後からおられない筈ですが、にもかかわらず河村先生だけが賃金カットされてるのか、理由を明らかにして下さい。

前田 私の方は、学校日誌は出しましたが、賃金カットについては市教委の方に。
分銅 何らかの報告を市教委にした筈ですね。
前田 はい。無断職場離脱の報告はしてありますが、どういふふうにされたのかは記憶にない。

分銅 この学校日誌のようなものを市教委に出しただけなのか、九月二日の件については別途なんらかの報告を市教委に出したのかどうか。
前田 ……記憶に……

分銅 その件で、学校から何か書類を出しておられたらあわせて調べておいて下さい。
傍 また新しく作るなよ。

最後に、六〇年度の河村さんの支部執行委員会への出席に関して、そのつど校長に伝えており、校長も特にきつく注意もせずきた事実や、支部執参加については市教委と継続交渉になり、その後は河村さんは従来通り火曜日の午後に出たことが明らかにされ、

組合監視のための学校日誌

分銅 六一年九月二日の日誌ですが、この日は水泳時間割ですね。この日、一学年は何があつたか覚えていますか。
前田 学年が一日に一学年ずつ水泳してました……

分銅 一学年は試験があつたんじゃないですか。
前田 ……

分銅 試験の日は当時どういう扱いでしたか。
前田 あ……それまでは研修で早く帰っている方もあります。

分銅 午後は帰ってもいいという運用をされてるんですね。
前田 いいことではありませんが。

分銅 この日、帰られた人は、ここに記載されている深沢・鈴木・河村の三名ですか。
前田 それは……

分銅 三名ですかと聞いてるんです。
前田 ここに書かれてるのは三名ですね。

分銅 現実はこの日、午後から退校された先生は何人いたんですか。
前田 ……私は記憶にありませんが、そのへん細かいところは教頭がやっていますので。

傍 校長のハンコおしてるやないか。
分銅 この日、退校した中でもこの三人だけ

特定してますね。

前田 おそらくこういうことじゃないですか。一年担当はそういう運用上やりましたから一年担当以外の先生でということでは……

傍 三人とも一年担当やないか!

分銅 何年の担当ですか。
前田 ちょっと……あの……私は……

分銅 確認してくれませんか、三人だけ特定したら意図的やからね。
前田 ちょっと記憶にないの……

分銅 同じくここに分会会議と書いてあるんです。これ学校日誌でしょう。他にもそういうことを書いてる日誌があるんですが、なぜ学校日誌に組合が会議したことまで書くんですか。
傍 一年の試験を書かんと何書いとんね!

前田 あのー勤務時間中にこういう会議はしないでくれということを書いて……

分銅 そうなんです、これ休憩時間とわざわざ書いてますよ。それも問題なんですか。
前田 休憩時間はいいと言って……

分銅 休憩時間中に分会会議をやったとしたこれは読めへんのですよ。そういう意味ですよ。
前田 そうです。

分銅 学校日誌にそもそも組合の会議を時間まで特定して書いてあるのは、どんな目的でこの学校日誌を使われているんですか。

校長の黙示の承認ではないかとの追及がなされました。

以上二時間に及ぶ第二回反対尋問で、処分証書類の偽造・改ざんの暴露を中心として、処分の不当性がますます明らかとなり、処分者側の立証根拠は失なわれつつあります。

お願い

市内定期ビラ配布について

市芦救援会事務局

市芦反弾圧闘争も二年目を迎えました。この間、審理廷の準備に追われたり、組合弾圧の嵐の中で守りを固めるといふ状況に立たされてきたといえます。しかし、一方では市民の方々の自主的な組織が生まれ、私たちと共通の課題をかかえて、共に闘っていくという状況も少しずつですが切り拓いていくというのも事実です。

しかし、まだまだ私たちの力は微力です。教育問題に関しても、「教育改革」の幻想はまだまだ市民に根深く浸透しています。まっとうな人間教育の論議がなされぬままに、平気で差別・選別教育を推進する教育行政が大手をふって歩いています。

私たちは、子供の教育権を奪うことが、その家庭の生存権をおびやかしていくことになる事実を多く見ています。その生活の中か

らの要求をかかげる市民・労働者の方々と連帯なくしては、私達の闘いの勝利もありません。

以上の点から、私達は次の行動を提起し、会員の皆様方の参加を訴えるものです。

毎月の一日の日に、早朝市役所本庁前でビラ配布、夕方駅前ビラ配布を行う。

審理廷の中で次々と明らかにされる教育行政の反動的実態を広く市民に訴え、また、子供の教育権を保障するとりくみを訴え、市民・労働者の生存権をおびやかすものへの闘いを闘って、広い連帯の輪を作り出す活動の一つとして、定期ビラ配布を行いたいと考えています。

当日日程

十月三日(月) 朝八時半 市役所本庁前、夕方五時 阪神・国鉄駅前ビラ配布。

三人 友三 豊江
乗鞍 友三 豊江
佐々木 静
井原 静

車いすのおじさん
じゅん君のお父さん
石ころばあちゃん

設立趣意書 障害者が街で共に生きる みんなの「麦の家」

私たちは、みんなと
学校へ行き、街で
共に生き抜きます！

芦屋市の障害児は、この一五年間、全国に先がけて実施されてきた進学保障制度により、中学校を卒業したら市立芦屋高校への進学の道が開かれました。ところが、市教育委員会は、一昨年より「教育改革」と称して、障害児をはじめ、手のかかる子は切り捨てるという方針を打ち出し、今年市芦を受験したムー君、じゅん君をはじめ、多数の生徒を切り捨てました。

私たちは、障害児の高校入学を実現する闘いを続ける一方で、ますます障害者が生きにくくなっているこの芦屋の街でたくましく生き抜くため、障害者や障害児の親が気安く利用できる「たまり場」、拠点が是非とも必要であると考え「麦の家」を設立します。その中で、障害者にかかわる教育、生活、仕事などの問題を考え合い、解決していきたいと思えます。そのためには、人手がいります。お金がかかります。あなたも是非「麦の家」の協力者になって下さい。

「麦の家」を障害児・者が 地域でたくましく生きるよりどころにしよう

みんなと一緒に地域の保育所、幼稚園、学校に通いたい

障害児の就園、就学
教育を考える拠点に

兄弟やほかの子どもと同じように、わが子も友だちに囲まれて楽しく育って欲しい。できないことがいっぱいあっても、お互いに認めあう関係の中で、障害者として生き抜く力をつけて欲しい。そして「卒業しても一人ぼっちにならないように」と願わない親はいません。

しかし、市教委は、障害児の高校進学を閉ざす一方で「地域の保育所や小・中学校に行きたい」という障害児の親に対して、養護学校や施設に行きなさいという指導を強めています。三才児健診や小学校の就学児健診を通して養護学校への入学を盛んに勧められています。そして小・中学校の障害児学級

も一昨年、昨年と減らされてきています。また「障害児学級での授業を多くしなさい」という市教委の指導により、取り出し授業が多くなり、クラスの子どものうちの関係が壊されたり、一緒に遊んだり学びあう場が狭められたりしています。

保育所であれば「指定保育所」のため、校区外の遠方の保育所に通わなければなりません。でも、保母さんたちも頑張ってくれています。その中でたくさんの友だちもできました。でも、せっかくできた友だちも、卒業して校区の小学校に行く時には、その子どもたちとも離ればなれになり、また始めから人間関係を作っていくか、なればならないのです。いま、保育所も保母さんや調理師さんが減らされています。そのしわ寄せをいちばん受けるのは、やはり障害児たちです。

一方では就学前通園施設が設立されるような動きもあり、もし、

それができれば保育所よりそちらの方に就園指導されることも予想されます。しかし、保育所や小・中学校については親が「どうしても近所の保育所、学校に行かせたい！」と要求すれば、親の希望が最優先されるようになっていくのです。

「地域の保育所、学校に行きたい」と願っているお父さん・お母さん。子どもの教育のことで悩んでいるお父さん・お母さん。一人で悩んでいては、あきらめさせられたり、つぶされていったりします。就園、就学、教育にかかわる問題を「麦の家」に持ち寄って下さい。みんなで考えて解決していきましょう。学校の先生も多数参加して下さる予定です。

街で楽しく生きたい

障害者の仕事を
考える拠点に

高校を切られても、住み慣れた街や今までつながってきた人たちの中で生きたい。そう思った時、私たちは、やはり在宅するより他にありませんでした。

今でもムー君は、朝起きたら制服を持って二階から降りてきて「ガッコ」「ガッコ」と言います。街で山手中学校の生徒を見ると「ズボン」「カバン」「ヤマチュウ」とうれしそうに言いながら指をさします。

じゅん君は「市芦はバスで行くの？歩いて行くの？」としつこく聞きます。学校に行きたい、みんなと一語にいたい、という気持ちとこれほど強く持っているとは！そのことは在宅になって改めて感じました。

それに、育ち盛りの子どもたちと毎日親子さしむかいの生活をするのはやはり息がつまります。しかし、中学校を卒業した障害児が楽しんだり好きなことをしようと思っても、芦屋にはみんなの中心に参加できる場所や集まりがほとんどありません。ある子は歌がとでも好きです。その楽しみをつくるため、遠い川西まで出かけています。好きなプールで泳ぐため西宮まで行っている子もいます。このように楽しみを広げようとするれば、みんな他市に出かけているのが実情です。

学校時代は修学旅行や体育祭、文化祭、また、映画や買物、ドラ

イブ、電車に乗ることから、一緒に過ごし、工夫したり、話し合ったりする関係があったのにその関係を断ち切られてしまったのです。在宅の先輩である車椅子の乗鞍さんは、坂と車の多いこの芦屋の街が、障害者にとってどれほど住みにくいか体で感じながらも、たくましく生活しています。

「麦の家」を作ろうと言った時、乗鞍さんは会費だけではあてにならないとあまり乗り気ではありませんでした。何回か話していくうちに「よっしゃ！一緒にやるわ。そやけど、会費以外にも金を作る方法を考えなあかん」と言って、あくる日からアルミ缶集めに町中走りまわっています。「金を作んな！もうそれしか頭にありません。集めたアルミ缶を家の前になつちでつぶします。近所の迷惑もおかまいなしに大きな音でカンカンやります。そのうちいつの間にかアルミ缶が増えています。近所の人たちが少しずつ持ち寄ってくれていたのです。

私たちはそんな姿に励まされながら、家に閉じこもらずに、人との出会いを求め街へ出て一緒に参加していただける場を一つ一つ広げて

いきたいと思えます。

今「麦の家」では在宅になったじゅん君やムー君と一緒に街をぶらぶらしたり、買物をしたり、友だちを呼んで料理を作ったり、友だちが行っている高校に遊びに行ったり、大好きな電車に乗って出かけたりにしています。又、乗鞍さんを中心に五円玉でぞうりや五重の塔を作ったりもしています。もっと多くの障害者や親や応援してくれる人たちに参加していただきたいのです。

みんなと一緒に働ける場所がほしい

障害者の生活を
考える拠点に

仕事と言えば能力、能率等、学校以上に働く者を選別しがちですが、その発想はどこかおかしいと思えます。

私たちは、どの仕事ができるかではなく、できないことがいっぱいあっても障害者が確実にその仕事に参加し、障害者がいることでその仕事の色々工夫され特徴づけられるものになればよいと思えます。

私たちは、子どもたちが学校で共に学び、共に育つ中で作り上げてきた関係を、今度は仕事を通して街の中で作っていきたいのです。私たちは、そのとっかかりとして県下各地の障害者たちの生きる場、作業所、店から生産され販売しているパン、牛乳、卵、豆腐、調味料などの食料品、トイレットペーパー、洗剤などの日用品の共同購入を始めています。(それは「シティライト芦屋」として一年前よりすでに活動しています。)

それは、配達を通して同級生や学校、近所の人々と声をかけ顔を合やす機会をより多く作りたからです。最初は品物を壊したり、落としたりしながらも、くり返し出会うことで励まされたり、叱られたりしながらお互いが工夫されるパンはおいしいよ。次も楽しみに待っているよ」「じゅん君くんはトイレットペーパーも持ってきてね」そんな関係が育ってくれればうれしいです。

配達の中で、友だちの誰かが「うちの仕事手伝わないか」とか「いい場所があいているから、一緒に何か店でもやらないか」と声をかけてくれる関係へと発展していくことを夢んでいます。「働く場が欲しい」この障害者にとつて切実な願いを実現するために「麦の家」をたまり場にしているんなアイデアを持ち寄って欲しいと思います。

をかけた関係へと発展していくことを夢んでいます。「働く場が欲しい」この障害者にとつて切実な願いを実現するために「麦の家」をたまり場にしているんなアイデアを持ち寄って欲しいと思います。

以上述べてきました通り、私たちは、この芦屋の町で障害児・者

みんなの「麦の家」賛同のことば

わたしたちは、敗戦後、にんげんがばらばらにされてきたことのおよみに気がつきました。

そして、民主主義の根本は、すべての人間をひとりひとり尊いねうちをもつものとしてみる心であることを知りました。

最近、すべての人たちが地域社会の中で共に育ち共に学び共に働ける運動が拡がりつつあることはとてもうれしいことであります。

このたび平和と民主主義を旨とする文化都市「芦屋」において、「障害者」が街で共に生きる・みんなの麦の家・設立の呼びかけを知り、心からうれしく趣旨に賛同いたします。

どうぞ思いやりとやさしさをもつ芦屋市民の方々のふれあいとご理解によって、表踏みのように一步一步踏み固め進まれますようお祈り申し上げます。

が一人の市民としてたくましく生き抜いていくためのよりどころとして「麦の家」を設立します。しかし、この「麦の家」を運営していくためには、多くの人々の御協力と資金がいります。あなたもぜひ「麦の家」の協力者、会員になって下さい。お金のある人はお金を、知恵のある人は知恵を、力のある人は力を、時間のある人は時間を、情熱のある人は情熱を「麦の家」に寄せて下さい。そして一度お立ち寄り下さい。

みんなの「麦の家」設立のための二〇〇万円募金のお願い
具体的に活動・運営していくために、設立資金として二〇〇万円を必要としています。多くの方々からの募金をよろしくご協力下さいますようお願いいたします。
◎会員になって下さい。
・維持会員(個人) 月一口五〇〇円(何口でも結構です)年間まとめて払い込まれても結構です。
・臨時カンパ お気持ちのままお願いいたします。
・お払い込みは
◎郵便振替神戸六―三九五七六 麦の家
◎「麦の家」事務局へ直接
◎「麦の家」スタッフへ手渡し
今すぐお電話下さい。
〇七九七―三二―三七七―
芦屋市船戸町二―一三

社会教育関係団体の登録不承認処分に関する異議申立書

一九八八年八月二六日

芦屋市教育委員会委員長 北村 春江 殿
異議申立人 芦屋の教育を考える市民の会
中村 猛

次のとおり異議申立てをする。

- 一、異議申立て人の住所、氏名
芦屋市高浜町四―一―一三四四
芦屋の教育を考える市民の会
中村 猛
- 二、異議申立てに係わる処分
芦屋市教育委員会が、異議申立て人に対し、昭和六三年六月二九日付、芦教委社文第四二号をもって行った、社会教育関係団体の登録の不承認処分
- 三、異議申立てに係わる処分があったことを知った年月日
一九八八年六月三〇日
- 四、異議申立ての趣旨
本異議申立書、二、に記載の処分を取消し「芦屋市社会教育団体として承認する。」との決定を求める。
- 五、異議申立ての理由
(一) 本件不承認処分には、次の誤りがある。
(1) 貴庁の本件処分には、適用法令の誤りがある。

六月二四日開催された芦屋市教育委員会の会議記録によれば、芦屋市教育委員会が「芦屋の教育を考える市民の会」を不承認とした根拠法令は、「社会教育法」(昭和二四・六・一〇法二〇七)第一〇条であるが、芦屋市教育委員会が異議申立て人に通知した不承認の決定の根拠法令は、「芦屋市社会教育団体の登録に関する規則」(教育委員会規則第四号)第三條であり、これらはそれぞれ別の法令である。

(2) 貴庁は事実を誤って認識している。
一九八八年七月五日、同八月三日に行つた「芦屋の教育を考える市民の会」の代表者との交渉において、貴庁は「芦屋の教育を考える市民の会」の機関誌「ともに学ぶ」第二号に、教育長個人に対する誹謗中傷があり、そのため「芦屋の教育を考える市民の会」は公共性がないと判断した」と説明したが「ともに学ぶ」第二号は、教育行政に対する市民としての批判を表明したものであり、行政に対する批判は、市民の当然の権利である。「芦屋の教育を考える市民の会」がした批判は「公人」教育長に対するもので

あって、「公人」教育長に対する批判は、純然たる個人に対する批判と同列に論じられるものではない。
(3) 貴庁は、社会教育法第一〇条および芦屋市社会教育団体の登録に関する規則第三條の解釈を誤っている。
貴庁は、社会教育法第一〇条および芦屋市社会教育団体の登録に関する規則第三條にいう「社会教育に関する事業」とは、「公共的な事業である」と解釈した」とするが、それは全く法的根拠に基づかない独断的な解釈である。
また、「公共的な事業」の解釈について「芦屋の教育を考える市民の会」のした行政に対する批判が「限度」を越えたため、「公共的な事業」でない」と判断した」とするが、「限度」の基準は明らかでない。
〔よって、不承認処分の取消を求めるため、本異議申立てに及ぶ。〕

六、処分庁の告示の有無および内容
八月一五日、社会教育文化課より、文書で「この処分について不服がある場合には、この処分があったこと知つた日の翌日から起算して、六〇日以内に芦屋市教育委員会に対して異議申立てをすることができる」との告示があった。
以上

お願い

九・二九市芦反彈圧闘争 二周年集会への参加について

芦屋市立芦屋高等学校教職員組合
市芦救援会

貴労組・争議団・地域共闘のご健闘に心から敬意を表します。
また平素は、市芦反彈圧闘争・救援会活動に温かいご支援をいただきここに厚く御礼申し上げます。

さて、一昨年九月二九日の組合役員二名に対する停職一ヶ月処分が始まる市芦教組に対する弾圧は、今年一〇月で二年目を迎えることになりましたが、市教委の攻撃は一層拡大するばかりです。

松本教育長は、生徒の教育権保障運動をすすめる教組へのなりふりかまわぬ弾圧を背景にして、臨教審を先取りした差別・選別教育を推進し教育現場の管理統制を強制的に押し進めています。

市芦では、教師を教壇から追放する大量強制配転が、この二年間で九名にもおよび、組合員の1/3にもいたっています。

この配転攻撃は国労をはじめとする全国の闘う労働者・労働組合への資本の攻撃と同質のものであり、絶対に許すわけにはいきません。

私達は、不当処分・「行革」という名の定員削減・大量強制配転攻撃に対し、不当労働行為としてその処分撤回を求めて市公平委員会の審理廷闘争を闘ってきていますが、審理もやっと証人調べの段階に入り、処分証拠書類の偽造という事実も明らかにされ、処分の不当性は一層明白になってきています。

この間、多くの労働者・市民の方々の温かいご支援をいただいておりますが、今後とも審理廷闘争の勝利と地域における反合理化闘争や生活と

権利を守る闘争など、労働者・民主団体・市民の方々との連帯の輪を求めて、下記のとおり集会を開催いたしますので、是非とも集会にご参加下さい。

日時 一九八八年九月二九日(木) 一八・〇〇〜
場所 芦屋市民センター 四〇一号室

日程

- 経過報告
- 弁護団報告
- 記念講演 平坂春雄(全港湾関西地本書記長)
- 意見交流
- 決議文採択

活動日誌〈抜粋〉

1988.8.16~9.15

8・22	事務局会議。	6	法対会議。
23	大阪教員支援グループと交流。	7	第十一回公開口頭審理。
26	芦屋地労協納涼大会。「教育を考える会」が社会教育団体登録不承認について、市教委に異議申立書を提出。	8	同盟公判結審傍聴。
27	事務局会議。	10	分会会議。拡大事務局会議。
29	「麦の家」焼肉パーティー	12	「尼崎に奨学金を！」教育シンポジウムに参加。
30	通信No.20発送。芦屋市部落解放研究大会実行委に参加。拡大事務局会議。	14	精中分会に支援アピール。芦屋市部落解放研大会ビラ配布。
9・1	市芦校門前早朝ビラ。夕方駅ビラ配布(教育改革批判)	お知らせ
救援会通信が第三種郵便認可を受けました。この誌面をかりて、ご支援いただいた方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。	
2	市役所本庁前ビラ。		
4	「教育を考える会」に参加。		